論文の内容の要旨

氏名：徳　本　善　彦
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：坂口安吾研究――戦間期における文体とジャンルの展開

本論文は、坂口安吾の戦間期における小説や評論、随筆などのテクストを対象に考察したものである。安吾は戦後の「堕落論」（1946）、「白痴」（1946）によって脚光を浴び、以降は人気作家として大量の文章を書くことになるが、本論では無頼派として語られるようになる坂口安吾の、文学論を確立するための初期の思考の遍歴や、小説の表現を模索する中で書かれたファルスや随筆、歴史小説などを対象に「坂口安吾」という作家が構成されていく過程を描き出すことを主たる目的とした。

第一章では坂口安吾の文壇デビューの契機となった「風博士」（1931）について論じた。既に多くの先行研究がある中で、これまで問題とされてこなかった観点として演説調の語りと探偵小説のような構成に注目した。前者には坪内逍遥『ジュリヤスシーザー』、後者には芥川龍之介「開化の殺人」という先行するテクストを参考にすることで、それぞれの形式によって語ることが却って形式自体の空虚さを顕にしていることを読み解いた。さらに、「FARCE に就て」（1932）、「茶番に寄せて」（1939）に書かれたファルス（「道化」）についての議論をもとに、「風博士」というテクストが合理的な語りの形式を敢えて用いることで、ファルスの主題である「笑ひ」を高め、深めていることを論じた。その上で、風博士が突然失踪するというこの小説の結末が、後の「文学のふるさと」（1941）やその他の小説に通じていることを結論付けた。

第二章は坂口安吾の初期評論である「FARCE に就て」を中心に、この文学論が同時代の文脈の中でどのような位置にあるのか、またそこから派生した文学論や小説の文章についての議論がどのような射程を持っていたのかを論じた。まず、先行研究を参考にしながら「FARCE に就て」には二つの系列の文学的志向が述べられていることを確認した。その内の一つは、『日本現代文章講座』に書かれた「意欲的創作文章の形式と構成」（1934）に引き継がれていく小説の文章についての議論である。ここで取り沙汰された、新しい「現実」をいかに表現するかという課題は、同時代の文学場で共有された〈新しい文章論〉という問題であった。芭蕉の俳句を例にして述べられる「純粋な言葉」についての思考を萩原朔太郎との類似において考察することで、それが散文詩に近い文章表現へ近づきつつあったことを確認した。もう一つの文学論的志向は、「FARCE に就て」の後半で述べられたファルスについての議論である。「現実」の全てを肯定し「笑ひ」によって昇華させるという、後に「茶番に寄せて」へと引き継がれたこの議論が、〈新しい文章論〉から派生した散文詩的傾向とどのように結びつくかをベルグソンの『笑の哲学』を参照項にして「笑ひ」と「夢」という観点から考察した。

第三章は坂口安吾の小説と並んで評価の高いエッセイや随筆類について、これまで問題とされてこなかった『都新聞』の「文芸」欄に掲載された雑文的「随筆」のいくつかを対象とした。これまで高く評価されてきた「日本文化私観」（1942）や「文学のふるさと」（1941）について、そこに書かれた文明批評や文学論などの内容が問題とされる先行研究に対し、エッセイや随筆といった形式自体を問題として取り上げた。安吾の小説以外のテクストを整理し「文明評論」や「文芸評論」以外の雑文的な文章を〈随筆〉として定義した上で、牧野信一の死をめぐる一連の〈随筆〉と、それ以前の「文芸評論」との間にある「私」という主語の差異に注目した。〈随筆〉の文章に見出される「私自身の生活」を語る再帰的な構造を持つ〈私〉が、牧野信一の死や京都での生活を〈随筆〉として語り、さらに「小説」や「文明評論」のようなジャンルにおいて語り直すことで、語る主体として確立されていく経緯を考察した。その一方で、〈私〉によって語られたエピソードが強度を増し前景化されることで、語る〈私〉が後景化し、「誰に向かって語っているのか、という問い」（安藤宏）が見えにくくなる事態に注目した。「ラムネ氏のこと」（1941）において見られる、既に語られた／後に語られるエピソードのコラージュという様態から、ジャンルを超えテクストをまたいで語る〈私〉の存在について考察した。

第四章では、「イノチガケ」（1940）について論じた。この小説は、坂口安吾の歴史小説の嚆矢として扱われ、先行研究では本文の典拠を明らかにすること、前後篇の差異を解消することが問題とされてきた。本章では、前篇・後篇のそれぞれを分析した上で、同時代の歴史小説文脈の中に「イノチガケ」を位置付け直すことでこのテクストが何を表現し何を実現しているのかを考察した。まず前篇では、史実上重要な役割を担ったフェレイラという宣教師が「イノチガケ」に語られていないことに注

目し、前篇の結末でキリシタン史上唯一の事件として語られた「棄教」が合理的な解釈を拒む事実として語り直されていることを論じた。新井白石「西洋紀聞」を下敷きとして構成された後篇では、白石の科白に見られる性格付けに着目し、「イノチガケ」において白石が合理的な人物として造形されていることを確認した。このことは、出来事を因果関係に基づいて合理的に語ろうとする語り手の趣向によるものであり、後篇が一つの物語として語られていることを見出した。次いで、同時代の「歴史文学」について、岩上順一と高木卓との間の論争を中心に考察した。岩上は高木の「現在相応」という主観的な歴史観を否定し、森鴎外に見られる客観的な歴史観に収まらない、両者を止揚する「歴史の実体」を主張したが、それもやはり一つの「物語化」に過ぎないことを柄谷行人の議論を参考にした上で明確にした。その上で「イノチガケ」というテクストの前篇・後篇における矛盾を、二つのテクストの語りの間を架橋するような一貫した解釈を求めるのではなく、それぞれが断絶して存在していることの意味を問うことの重要性を主張した。そのように見ていくことで、このテクストが同時代の歴史小説や「近代の超克」に至るような歴史観に対する批評性を備えていることを結論づけた。

第五章は 1941 年 12 月 8 日の太平洋戦争開戦という出来事と、そこで戦死した「特別攻撃隊」の軍人たちを題材にした小説「真珠」（1942）を対象に論を展開した。近年頓に注目を集め既に多くの先行研究が存在するこのテクストについて、「〈十二月八日〉小説」の一つとして取り上げられていた伊藤整「十二月八日の記録」を改めて俎上に上げ、同テクストにおける「私」と「真珠」の語り手である「僕」の視点の違いについて考察した。「十二月八日の記録」における「私」が市井の人々を見るのみに留まるのに対し、「真珠」の「僕」が見る主体であるのに加えて、生活の当事者として見られる対象でもあることを明らかにした。この二重化された視点について、野家啓一『物語の哲学』における「話す」と「語る」という言語行為の差異についての議論を参考に、〈ハナシ〉と〈カタリ〉という概念に整理した上で「真珠」の二種類の語りを分析した。歴史的コンテクストから自由な「僕」とガランドウの道行きの〈ハナシ〉に、ラジオ放送に感動する「僕」の〈カタリ〉的エピソードが混在していることを、二重化した「僕」の視点の反転可能性によるものとして論じた。さらに、新聞報道からの「引用」で織りなされる「特別攻撃隊」の歴史的出来事が「あなた方」という対話の地平で語られているという矛盾について、固有名の問題を中心に据えて考察した。「特別攻撃隊」という呼称を「固有名」として用いるよう通達した新聞記事について、そこに日露戦争の旅順港閉塞作戦で戦死した廣瀬武夫の「肉片」という文脈があったことを見出し、さらに固有名で語られた兵士の死が型どおりの物語として固有性を失ってしまうというパラドクシカルな事態を確認した。その上で、「真珠」で語られた「あなた方」のエピソードが、固有性を奪う歴史的コンテクストに還元されないような「事実」＝「個性」としての「破片」であること、そして「僕」の視点の二重性が、結局のところ歴史的コンテクストの上でしか存在し得ない彼らの「個性」をリアリティのある「事実」として表現するために要請されたものであると結論づけた。

第六章は「黒田如水」（1944）を対象とする。このテクストには戦後『二流の人』の一部として収録された複雑な経緯があるが、ここでは講談のような語りの文体で成立したこのテクストが、1944 年という時代状況の中で発表されたという事実に意義を認め、単独の短編小説として論じることとした。まず、冒頭部の文章を分析することで、「歴史を見てきた」ように語られていることや音読を意識したような語りから、このテクストが「講談先生」（1943・3）で述べられた「講談の技法」が取り入れられていると仮定した上で考察を進めた。近代以降の講談の歴史を通覧し、大正末年の「新講談」から「大衆文学」へつながる経緯の中で講談が徐々に衰退していったこと、戦時下において「皇国」の歴史を語る名目で復活したことを確認した。その上で、安吾の「黒田如水」と同時期の吉川英治「黒田如水」（1943）を見ることで、そこで描かれているのが「武士道」というイデオロギーに基づいた行動をとる人物であることを論じた。それに対して、安吾版「黒田如水」ではイデオロギーと無縁の人物のエピソードが因果関係によって脈絡づけられないまま、断片的に語られている。「事実そのものが物語る」という〈講談の技法〉によって語られた「黒田如水」は、講談の形式を用いながら内容が形式を裏切るような構成をなしており、同時代の講談や歴史についての議論を相対化する批評性を持っていると結論付けた。